

文化財 ニュース

2 August 2012 Summer

■ 平成24年度文化財企画展 「東京—その復興の歴史—」 開催 特集号

会期：平成24年7月17日(火)～9月2日(日)

※8月20日は休館

月曜～土曜：午前10時～午後6時

日曜・祝日：午前10時～午後5時

会場：1階特別展示室(観覧無料)



「空襲」 昭和20年(1945)

千代田区教育委員会所蔵
市ヶ谷上空の写真。
中央を流れるのは外堀である。
写真中央の二又の場所は市ヶ谷駅。

Index

2 特集 平成24年度文化財企画展
「東京—その復興の歴史—」開催

4 埋文ニュース 「千鳥ヶ淵戦没者墓苑の発掘」

6 区内文化財調査 「榎稲荷と元徳稲荷」

7 追悼 吉原健一郎先生

8 平成24年度文化財企画展
図録販売・講座のおしらせ

東京の歴史は、関東大震災や空襲などの戦災からの復興の歴史でもありました。

震災・戦災とGHQの占領期を経て、昭和30年代には急激な経済成長を遂げ、東京オリンピックは、復興の象徴として世界に伝えられました。

一方で、オリンピックの開催のため都市基盤の整備が行われ、東京のまちなみは大きく変わることになります。企画展では、写真パネルによって、復興の様子とともに、まちなみの変化などを紹介します。

<展示解説>

以下の日程で、担当学芸員が展示解説を行います。

(30分～40分程度・予約不要) 時間になりましたら特別展示室の入口付近にお集まりください。

7月26日(木) 14:00～ 8月26日(日) 13:00～

8月5日(日) 13:00～ 8月30日(木) 14:00～

「東京—その復興の歴史—」

平成24年度文化財企画展「東京—その復興の歴史—」では、震災・戦災を経て、復興し現在にいたる様子を紹介していきます。この部分では、東京オリンピックと交通体系の変化について紹介します。

東京オリンピック

日本は、昭和15年(1940)のオリンピック開催地に立候補・開催決定を受けていました。しかし、昭和13年(1938)に日中戦争の影響から中止を決定しました(競技会場として建設中であった諸施設は、のちの東京大会に生かされました)。

それから24年後、昭和39年にアジア初となるオリンピックを開催しました。敗戦・占領を体験した日本が、戦後の急速な復興を遂げて国際社会への復帰をアピールする機会となりました。

主会場となったのは、明治神宮外苑の競技場、代々木の体育館、駒沢公園でした。千代田区内においても、日本武道館(北の丸公園)が柔道競技の会場として使用されました。競技大会と同時に開催される「芸術展示」の会場として、国立教育会館虎ノ門ホール(霞が関三丁目)では「雅楽」が上演され、通信総合博



写真1 水道橋駅付近の観衆

物館(大手町二丁目)では「スポーツ切手」の展示会が行われました。

聖火リレーは、オリンピックの母国ギリシャで採火されたのち、アジアでは太平洋戦争の戦場となった各国をリレーされ、鹿児島・宮崎・北海道の3か所から国内リレーが始まりました。聖火は、東京都庁(丸の内三丁目)に集められ、開会式前夜から当日朝までは皇居前広場(皇居外苑)にて保管され、国立競技場(新宿区霞岳町)に運ばれています。

千代田区でも、区民から聖火リレー参加者を募り、3コースでそれぞれリレーをしています。

写真1は、文京区から都庁を目指すコースのもので、水道橋駅付近で公衆トイレの屋根に昇るほど見物客が集まっています。

写真2は、神保町交差点を水道橋から錦町に向けて走る聖火ランナーの姿です。



写真2 神保町交差点を走る聖火ランナー



写真3 呉服橋停留所付近の都電

道路整備と交通の変化

東京には、明治時代になると多数の馬車鉄道・路面電車を経営する会社が設立されましたが、次第に吸収・合併が進み、明治39年(1906)に東京鉄道株式会社が発足しました。その後、明治44年(1911)に、同社が東京市に買収されて東京市電気局が発足し、市内鉄道は公営化されました(市電、のち都電)。

最盛期には213kmの総延長、41の系統で運行されており、国内最大の路面電車網として、通勤・通学をはじめ、市民の足として活躍していました。

区内には、多数の路線が通っており、特に「須田町」停留場付近は、各所からの路線が交わるとともに、中央線「万世橋駅」前という立地もあって、乗降客・乗り換え客で、繁華街として賑わっていました。

大正12年(1923)の関東大震災により路面電車網は大打撃を受けます。橋梁の陥落と線路の変形、瓦礫による線路の埋没、火災による車両の焼失などです。東京市は、市民の足を確保するため乗合自動車(現、都営バス)を導入しています。

その後も、路面電車はさまざまな苦難にあいます。

戦時下には、不要不急路線を撤去してレールを供出するよう求められています。

復興の進展に逆行するように、オリンピックのための道路整備、地下鉄建設に伴う路線競合、交通局の赤字解消のための縮小という理由から、次々に廃止されて、昭和47年(1972)には早稲田～三ノ輪橋間のみを残して現在に至ります。

路面電車はほとんどが、主要道路上に軌道を敷設していました。そのため、自動車の増加により軌道内での走行が許可されると、自動車渋滞に電車が巻き込まれて、定時運行を続けることが困難になったことも原因の一つといわれてい

ます。

写真3は、現在の東京駅日本橋口付近で、大手町からガードをくぐった電車が呉服橋停留場に近づく様子です。

写真4は、靖国通りを走る都電の様子で、駿河台下交差点と神保町交差点の間あたりです。画面右側には、神保町の古書店街が見えます。長屋建築の建物は、現在でも一部残っています。

(高木知己)



写真4 渋滞の中を走る都電(靖国通り)

千鳥ヶ淵戦没者墓苑の発掘

平成23年(2011)8月下旬から10月上旬にかけて、千鳥ヶ淵戦没者墓苑内で発掘調査が行われました。

千鳥ヶ淵墓苑付近は明治時代から、縄文時代の貝塚が存在する可能性を指摘されてきた場所です。実際に今回の調査地点から約150m北西の三番町遺跡では、1992年の調査で約1700～1800年前(弥生時代末から古墳時代初めごろ)の住居跡が2軒、2007年の調査で約6000年前(縄文時代前期)の住居跡10軒や貝塚が確認されています。

千鳥ヶ淵墓苑内の発掘調査で確認された縄文時代の遺構は、約4000年前(縄文時代後期)のピットと呼ばれる小さな穴数基です。このほか、縄文時代の遺物を多く含む地層が確認され、直径約4cmある土製球状耳飾りという約6000年前(縄文時代前期)のイヤリングが区内で初めて出土しました。



出土した縄文土器の一部(上)と耳飾り

今回の調査の大きな成果のひとつは、住居跡1軒が確認されたことです。住居は、家の床を周囲の地面より一段掘り下げて作る、いわゆる^{たてあなじゆうきょ}竪穴住居と呼ばれるもので、貯蔵穴と呼ばれる、ものを保管するための住居の床を掘った穴も見つかっています。

貯蔵穴から出土した土器は、今から1700～1800年ほど前(弥生時代終わりごろから古墳時代初めごろ)のもので、1992年の三番町遺跡の調査で確認された住居跡と同じ時代です。

このことから、三番町遺跡の住居と千鳥ヶ淵墓苑の住居は、同じ集落内の住居跡である可能性が高く、千鳥ヶ淵墓苑の遺跡は三番町遺跡の一部であることが明らかとなりました。



竪穴住居(上)と住居内の穴から出土した土器(下)

これまでの地質調査などから、もともと調査地付近は、南側にあった谷に面して北東から南西方向へ下る斜面地であったと考えられています。このように起伏のある地形だった千鳥ヶ淵付近を含む番町と呼ばれた旗本などの屋敷地は、徳川家康が江戸に入った直後の400年ほど前に谷を埋め立てるなどして整備されたことが知られています。

この事実を裏付けるように、今回の調査でも、本来の地形を示す斜めの地層と、それを埋めて平らにした江戸時代の盛土層が確認されました。このような埋め立てなどの土地造成でできた人工の地層を盛土と呼び、区内の調査では数多く見られます。



斜めの黒い地層の上の黄色い土が近世の盛土

江戸時代のこの地域は旗本などの屋敷地でしたが、元禄10年(1697)と寛政4年(1792)の少なくとも2度、火事があり、火事後の区画整理によって、火除けのための空き地となります。元禄の火事後、宝永7年(1710)に一度は屋敷地に戻りますが、18世紀末の寛政の火事後は菜園などに転用される空き地となり、そのまま明治を迎えたことが江戸時代の資料によってわかっています。

調査では、このような土地の変遷を示すように、火事で焼けた皿や瓦などの廃棄物を捨てたと考えられる18世紀末ごろのゴミ穴の遺構が確認されています。



18世紀後半の遺物 瓦が焼けて赤くなっています

近代の遺構では、レンガ積みの建物基礎などが検出されました。調査地点は明治29年(1896)まで閑院宮、その後、昭和20年(1945)の終戦まで久邇宮、賀陽宮と3家の宮家が住んだ邸宅があった場所です。

遺構は宮邸の建物基礎の一部と考えられますが、全国的に近代の宮邸の発掘調査事例はほとんどないことから、貴重な事例といえるでしょう。



レンガ積みの宮邸の基礎

今回は約90㎡と小さな面積で行われた調査でしたが、縄文時代に始まり、弥生時代末期、江戸時代から近代まで多くの成果を得ることができました。このように、一つの現場の調査で、色々な時代の様相に触れることができることも、遺跡調査の醍醐味です。

(斎藤一真)

神田の記憶・榎稲荷と元徳稲荷

過日、当館に奈良県の東洋民俗博物館が所蔵する絵馬についての問い合わせがありました。

同館創立者の九十九黄人(豊勝)氏収集のコレクションのひとつで、スーツ姿の亥年38歳の男性と着物姿の42歳の女性を描き、「御願成就」と書かれたこの絵馬は、戦後のものでしょうか、同館の記録には「神田・榎神社」とあるそうで、千代田区内にそのような神社が現存するのか、あるいはかつて存在したのかという質問内容でした。結論からいえば、区内にそのような神社が存在した事実はないということなのですが、そこには江戸時代前期に神田から移転した土地の記憶が映し出されていたのです。

ここではこの謎を解いていきたいと思います。

●神田の町名主河村家

現在、都内には榎稲荷という名前の神社が複数存在していますが、神田との関連性を考えると、江戸時代前期に神田から移転した経歴をもつ町名主河村家が管轄した地域に所在する墨田区立川4-12-24にある榎稲荷神社ではないかと考えられます。

そこで幕末の『江戸町鑑』をみると、河村家は本所徳右衛門町一・二丁目や菊川町一〜四丁目、および本所柳原一〜六丁目を支配地域としており、現在墨田区立川三・四丁目、菊川三丁目、江東橋一・二・五丁目に当たることがわかります。

では次に江戸の地誌書『御府内備考』に収録されている、文政11年(1828)にこの地域が作成した町の書上をみていきましょう。

それによれば、河村家の先祖は美濃国の出身の武士の立石豊後といい、彼は天正18年(1590)8月の徳川家康江戸入国に従い、のち神田和泉橋際の土手周辺に屋敷を拝領します。この地はのちに龍閑町代地や谷田部落細川家上屋敷になったといえますから、現在の岩本町三丁目周辺のことと思われる。

豊後のあと家は息子の徳右衛門が継ぎ、市街の発展とともに屋敷の多くを町屋とし、自らは町名主となると、町屋は地主の名前をとって徳右衛門町と称するようになっていきました。また、同時に彼は隣接する柳原町一〜三丁目の支配も任されるようになりました。

三代目太郎兵衛の寛文元年(1661)、徳右衛門町およ

び柳原町が幕府によって召し上げられ、替地を開発進行中であった本所の地に与えられ、移転することになりました。以後同家は代々存続していきますが、河村姓に改姓したのは四代目のときからで、彼は海運や治水の功労者で知られる河村瑞賢の甥にあたり、三代目の婿養子となったためだといえます。

●元徳稲荷

では、河村家移転先の徳右衛門町に神社はあるのでしょうか。そこで再び『御府内備考』の記述をみていくと、徳右衛門町一丁目に社地6坪の元徳稲荷があります。そしてこの稲荷が神田時代から存在し、移転にともない三ノ橋際に移された際、「元の徳右衛門町から引っ越してきた稲荷」ということにちなんで元徳稲荷と称するようになったそうです。

元徳稲荷は江戸時代、腫れ物平癒の願掛けで知られ、治ると里芋を供える風習がありましたが、明治32年(1899)刊行の『東京土産番附集覧』には、東京の代表的な縁日のひとつに、毎月6・15・22・26日の「本所三ツ目」の元徳稲荷が取り上げられているように、明治から戦前までは縁日で非常に賑いました。

●榎稲荷

一方、河村家の支配町には菊川町があり、こちらは神田から移転した徳右衛門町・柳原町とは異なって、御家人たちが拝領した町屋敷に由来し、元禄9年(1696)に町屋が許可されて開かれた町のような様子。榎稲荷はこの菊川町一丁目に56坪の社地を構える町内持稲荷で、『御府内備考』では町屋となる以前から土手際にあつたと述べられています。

文政11年当時は社地に隣接して本山派修験の吉祥院が住んでおり、彼が稲荷の日常的な世話をしていたようです。また、境内には樹囲3尺〜5尺(約90〜150cm)の榎が6本あって神木としていることから、この榎が社名の由来だとわかります。

榎稲荷は現在、東京大空襲犠牲者供養の地蔵尊と、空襲の爪あとを物語る炭化した榎が境内にあることで知られています。

神田の地を交差する土地の記憶は、現在もこうして場所を変えて受け継がれているのです。

(滝口正哉)

追悼 吉原健一郎先生

去る平成24年3月22日、千代田区文化財保護審議会会長で成城大学名誉教授吉原健一郎先生が肺がんのため逝去されました。ここでは先生を偲び、先生の千代田区や江戸との関わりを中心に取り上げたいと思います。

●吉原先生略歴

先生は昭和13年8月1日、東京府杉並区に生まれ、同42年3月に東京教育大学大学院文学研究科修士課程を修了されたあと、同年4月に東京都総務局都政史料館(のち東京都公文書館と改称)勤務となり、同58年4月に成城大学文芸学部助教授(のち教授)に就任されました。

先生は平成21年3月に成城大学を定年退職され、名誉教授となられましたが、その間同大学では学生部長や民俗学研究所長・大学院文学研究科長などを歴任されたほか、学会活動においても地方史研究協議会常任委員・同幹事長・同監事、歴史学会理事・同会長などを務められました。

また博物館や文化財行政との関わりも深く、国立歴史民俗博物館・江戸東京博物館の各種委員を務められたほか、『新編千代田区史』の編纂顧問や『江東区史』編纂委員、千代田区・墨田区・江東区・世田谷区の文化財保護審議委員などを歴任されました。

●文化財保護審議委員として

千代田区文化財保護審議会は昭和60年4月に発足しましたが、吉原先生は発足当初から委員を務められ、平成21年4月からは会長をされておられました。バブル景気とその後の不況は区内の文化財をとりまく環境に少なからず影響を与えていくなか、先生はご専門の近世史の見地にとどまらず、江戸から東京への移り変わりを多角的な視点から助言され、区内文化財の保護に重要な役割を果たされました。

また四番町歴史民俗資料館の収蔵資料調査の指導や、文化財として指定された古文書などを対象とした調査報告書の刊行の際に多くのご指摘をいただきました。なかでも『千代田の古文書』(平成21年)では、長年研究されてきた麴町の町名主矢部家についての論考をご執筆いただいています。

●江戸学と吉原先生

吉原先生は日本近世史がご専門でしたが、とりわけ都

市史や江戸町人の生活史に関する多くの業績を残されています。その背景には、大学・大学院時代に西山松之助氏に師事したことが大きいようです。西山氏は江戸町人研究会を創立し、それまで学界であまり目を向けられて来なかった江戸町人に注目することで、江戸の町の仕組みや町人の生活・文化といった、今日「江戸学」と呼ばれるジャンルの体系化を行いました。吉原先生はその中心メンバーのひとりとして町役人や江戸の銭相場などの研究を実証的に続けられました。

また、先生は東京都公文書館で『東京市史稿』の編纂にたずさわって、江戸の町方の古文書に長く接するなかで庶民文化に対する独自の視点を築き、幕末の江戸に明治維新期の東京の文化現象と連続する「嘉永文化」というべき文化の時期区分が存在することを提唱されました。なかでも、神田御成道西側(現千代田区外神田三丁目)で古本屋を営むかたわらで収集した情報を記録し続けた藤岡屋由蔵の『藤岡屋日記』に注目し、同書を読み解きながら幕末の江戸の世相を一般に広く紹介したことはよく知られています。

気さくな人柄で、携帯やブログなども積極的にされるなど柔軟で懐の深い先生の地域をみる眼は、確実に千代田区に根付いたことと思われます。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

●新審議委員に加藤貴氏

加藤先生は昭和27年北区に生まれ、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程を出られたあと、北区教育委員会文化財専門員や千葉大学・法政大学・早稲田大学第一文学部非常勤講師を経て、現在は早稲田大学教育学部非常勤講師・北区文化財保護審議会会長・葛飾区文化財保護審議会委員をされています。

近世都市史、なかでも江戸町方の支配構造の研究がご専門の加藤先生は千代田区との関わりも深く、『新編千代田区史』の主任専門員を務められたほか、平成18年度からは原胤昭旧蔵資料の調査に継続してあたられ、これまでも多くの助言をいただけてきました。

今後は江戸東京の中心である千代田の古文書や歴史資料について、文化財審議委員としてご指導いただきます。

(滝口正哉)

平成24年度 文化財企画展

「東京—その復興の歴史—」展示図録 販売のご案内

千代田区教育委員会・日比谷図書文化館では、文化財企画展「東京—その復興の歴史—」開催にともなって展示図録を作成しました(一部300円・A4版・全45ページ)。本書にはこの企画展で出品した写真のうち約90点の写真を掲載しています。来館の記念に是非お求めください。

当館1階のLibraryShop & Café Hibiya(常設展示室奥)、または当館4階の文化財事務室(展示期間中 月曜～土曜 10:00～18:00 日曜 10:00～17:00)にて販売しております。なお、郵送による販売も行なっていますので、詳細は文化財事務室までお問い合わせください。



平成24年度 文化財企画展

「東京—その復興の歴史—」関連講座のご案内

文化財企画展「東京—その復興の歴史—」にともない、関連講座を開催します。橋場氏の被災資料の保護や修復に関わったご経験から、震災と博物館の活動についてご講演いただきます。

●「震災と博物館—地域の記憶/震災の記憶をいかに伝えていくか—」

講師：橋場万里子氏

(パルテノン多摩歴史ミュージアム学芸員 首都大学東京・東京医療学院大学 非常勤講師)

日時：8月26日(日) 14:00～16:00

場所：千代田区立日比谷図書文化館 4階小ホール

参加費：200円

申し込み・問い合わせ：文化財事務室まで TEL 03-3502-3348・月曜～金曜9:00～17:00

または e-mail:rekimin@vesta.ocn.ne.jp

編集後記

本誌「文化財ニュース」は年3回発行しています。発行時期は、おおむね文化財企画展・文化財特別展、文化財指定のお知らせに合わせています。したがって、時期的に本誌で取り上げるタイミングに恵まれないイベントや講座が多くあることも否めません。例えば、毎年7月8月には「夏休み親子体験教室」、秋には文化財事務室が開催する「古文書講座」、さらに文化財ウィーク開催期間中の講座・ウォーキングなど。本誌でお知らせしきれない企画については、開催時期が近づきましたら日比谷図書文化館文化財ホームページや「広報千代田」にて随時お知らせしております。是非こちらもご確認ください。(加藤紫織)



開館時間 月～金 10:00～22:00

土 10:00～19:00

日・祝 10:00～17:00

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。

休館日 毎月第3月曜日 年末年始
特別整理期間

●東京メトロ丸の内線・日比谷線・千代田線 霞ヶ関駅 徒歩5分

●東京メトロ 千代田線・日比谷線「日比谷駅」徒歩約7分

●都営三田線 内幸町駅 徒歩3分

※当館に駐車場はございません。

文化財ニュース 第2号

発行日 平成24年7月17日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
HP: <http://hibiyal.jp/bunkazai/index.html>
e-mail:rekimin@vesta.ocn.ne.jp

印刷 株式会社 商華堂